

さわやかに たからかに とこしえに

秋田県立横手清陵学院中学校・高等学校 校長室だより第10号
2021年3月26日(金)発行 文責 信田 正之

人生は思いどおりにならないから面白い

幼いころから生き物が好きでした。小学校時代は学校から帰ると魚とりに出かけることが日課で、夏休みはカブトムシやクワガタを捕まえることに熱中し、家にいるときは生き物図鑑を手あかがつくまで読みふける。将来の夢は生物学者になること。引っ込み思案の私は人前に出ることが大の苦手で、研究者こそが自分にふさわしい職業だと考えたのです。そんな私が、やがて教員という人前に立つ仕事に就くことになろうとは、何とも皮肉な話です。

人生を振り返ると、自分の描いた筋書きどおりにはいかないことが多かったように思います。中学生の時は受験直前でスランプに陥り、第二志望の高校へ入学。高校3年の時には生物を専門に学べる県外の大学を受験し、何とか合格できたまではよかったのですが、大学3年のときに父親が病に倒れ、一人っ子の私は研究者の道をあきらめて渋々実家に帰ることに。それなら、教員として高校生に研究の面白さを伝えようと意気込んで赴任した最初の学校で、いきなり経験のない野球の指導を任せられ、それから十数年にわたって野球漬けの日々を過ごします。自分の母校に転勤したときも、OBだという理由で多くの仕事を任せられ、その次の職場では自宅から片道70kmの距離を5年間通い続けました。

17年前に横手清陵学院に赴任してからも、その流れは続きます。特に開校初年度は学校のあらゆる仕組みづくりから始まり、いくつもの役職を兼任し、初めての中学校「理科」の指導や高校の教科「情報」の指導に苦しみました。当時の私の日課は、平均4時間の授業をこなし、空き時間は教材研究に勤しみ、放課後は野球の指導。練習が終わると職員室に戻って書類の作成や翌日の授業の準備。帰宅時間が真夜中なんて当たり前で、ひどいときには翌日まで一睡もせず職員室で仕事をしていたことが何度もあります。言っておきますが、これらの状況は自分が希望したものではありません。新型コロナウイルスと一緒に、私の意図とは無関係に困難が列をなして私のもとを訪れるのです。ただ、負けず嫌いの私には、「逃げる」という選択肢はありませんでした。ですから、今思えば「自ら困難に身を投じた」と表現したほうが正しいのかもしれない。

こんな話をすると、さぞかし自分の人生を悲観しているかのように聞こえますが、実はそうではありません。むしろ、かなり満足していると言えます。時々、ふと「自分が研究者になっていたら今ごろどうしていただろう」と想像することがあります。夢が叶えられた達成感があったにせよ、思いどおりにならないこともあったに違いありません。もしかしたら、後悔や挫折に苛まれる日々を送っていたかもしれない。何事も、やってみなければ分からないのです。

現実の人生では、楽しいことよりもつらいことのほうが多かったように感じますが、経験を通して学んだ一つ一つが、私をここまで育ててくれたことは確かです。何より、困難に立ち向かうスリルと、それを乗り越える醍醐味が、私に「生きている」という実感を与えてくれました。もちろん、これまで共に過ごした多くの先生方や教え子たちとの出会いは、他の職業では得られない「一生の宝物」と言えるでしょう。「人生は思いどおりにならないから面白い」。この言葉を、退職間際の私から、先の長い人生に旅立つすべての清陵生に、心を込めて贈ります。今まで本当にありがとうございます。またどこかでお会いしましょう。